研究ノート

倉敷考古館所蔵の安養寺第三経塚出土瓦経の整理経過について ―ひかり拓本撮影―

A Report on the Surveying of the Sutra Tiles Excavated from An'yoji Daisan Kyozuka in the Kurashiki Archaeological Museum Collection
—Utilization of the "Hikari Takuhon" App—

伴祐子（公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員）
BAN Yuko (Curator, Research Department, Ohara Art Foundation)

要旨

この整理報告では、倉敷考古館の所蔵資料である安養寺第三経塚出土の瓦経の再整理と画像記録について、その過程を報告するものである。

安養寺第3瓦経は昭和33年（1958）に安養寺裏山の発掘調査にておいて発見された遺物であり、発掘後の整理において、水を使用して瓦経を一枚ずつ分離し、文字を読み取り経種同定を行っている。資料はその後、紙で梱包し、木箱に立てた状態で保管されていたが、包み紙と木箱の経年劣化のため瓦経が崩壊する恐れが生じた。再整理では破損状況を記録し、個別にトレーに移し替え保管した。瓦経は劣化が激しく、報告書と照合しながら少量ずつ進める必要があり、記録には通常の写真に加え新たにひかり拓本を試みた。

ひかり拓本を用いても、すでに摩滅した文字を読み取る事は難しいが、瓦経表面の調整やスノコ状の跡、未報告の絵瓦の直線の浮かび上がりが確認できた。ひかり拓本は、撮影を進める中で精度を上げることが課題であるが、拓影は多くの情報を残すことに有効であることがわかった。

This is a report on the process of re-sorting and recording images of the sutra tiles excavated from An'yoji Daisan Kyozuka (The Third Sutra Mound at An'yoji, a temple in Kurashiki) and kept at Kurashiki Archaeological Museum.

The sutra tiles in the third sutra mound in An'yoji are relics discovered on a hill behind the temple during an excavation undertaken in 1958 (Showa 33). After the excavation, using water, each one of the tiles were separated, the inscriptions were deciphered, and the sutras were identified. The tiles were then wrapped in paper and stored in an upright position in wooden boxes. However, due to deterioration of the wrapping paper and wooden boxes over time, there was a danger of the sutra tiles disintegrating. Therefore, in order to re-sort them, the damages were recorded, and each tile was transferred into an individual tray. The sutra tiles have deteriorated severely, and the re-sorting needs to be carried out little by little checking each one against the report. In addition to normal photographs, "Hikari Takuhon," i.e., optical rubbing, a unique image processing technology, has also been attempted as a new form of recording them.

Even with "Hikari Takuhon" (optical rubbing), it is difficult to decipher the letters which have already worn away. However, it has enabled us to confirm how the surface of the sutra tile was adjusted, lattice-shaped traces, and the surfacing of hitherto unreported lines on picture tiles. While we do need to improve the precision of utilization of the "Hikari Takuhon" app, we have found that it is an effective means to retain a lot of information.

はじめに

倉敷考古館の所蔵資料である安養寺第三経塚出土の瓦経（以下 第三瓦経）は昭和三十三年（一九五八）に安養寺裏山の発掘調査にて発見された資料である。当時の整理では一枚ずつ紙で梱包し、木箱に立てた状態で保管されていたが、包み紙と木箱の経年劣化のため資料に破損の恐れが生じた。安養寺第三瓦経の性質上資料そのものの劣化も免れないため、状態を確認しながら継続的に整理を行っており、整理記録のなかに新たにひかり拓本を試みたため報告を行うものである。

経塚と瓦経

仏教経典を後世に残すために土中に埋納した場所を「経塚」と呼び、経塚の造営は寛弘四年（一〇〇七）の藤原道長の吉野大峯山への埋納例がもっとも古く、平安時代後期紀の藤原摂関期から院政期に盛んになり、目的を変化させながら近世まで造営されている。経塚は、釈迦入滅後に仏法の教えが失われる末法思想を背景に、未来の仏である彌勒（みろく）如来が五十六億七千万年後にこの世に現れ、衆生を救済するという彌勒信仰のもと、彌勒下生の際に地中から経典が湧き出るよう、経典を後世に残す目的で聖なる山への埋納が行われたとされる。

「瓦経（がきょう）」とは埋納される経典の一種であり、粘土の板に経典を刻み焼き上げたものである。埋納する経典は多くの場合は紙の巻子であり、金属や陶製の経筒に入れ、さらに陶製や石製の外容器に入れて埋納を行う。地上部は盛土に葺石や石塔などの標識を置く場合があるが、後世に上部構造が改変されるなど、当初からの形状が不明な場合も多い。瓦経は紙本経に比べて圧倒的に数が少なく、遺跡としての経塚が日本国内で二〇〇〇カ所以上確認されているなかで、出土地が明確ではないものも含め瓦経は約五〇件程度が知られている。（注1）その中で紀年銘を持つ瓦経は八例あり、製作が行われていた時代は伯耆大日寺瓦経の延久三年（一〇五一）から伊勢小町塚瓦経の承安四年（一一七四）、までのおよそ一二〇年間が主流である。このほか天徳元年（一三二九）の紀年銘をもつ瓦経が二点知られる。（注2）これらは塔、五輪塔を捺印したものであり、安養寺の毘沙門堂付近から同様の瓦片も発見されているが、年代は不明である。（注3）その中で安養寺第三瓦経は應徳元年（一〇八六）の紀年銘をもっており、経塚全体においても、瓦経だけを見ても古い部類といえる。

安養寺経塚の発掘調査の概要

瓦経の出土した安養寺の経塚群は、岡山県倉敷市に所在する朝原山安養寺の裏山から昭和十二年（一九三七）に最初の一基が発見されており、これを第一瓦経塚としている。第一経塚の遺物は瓦経百九十六点、塔婆型が八点、土製宝塔一基があり、園田敬男氏、石田茂作氏、梅原末治氏により発見後の調査がなされ、昭和三十一年（一九五六）に国の重要文化財に指定された。（注4）現在は安養寺と東京国立博物館に収蔵されている。

続いて昭和三十三年（一九五八）に再び安養寺裏山から焼き物片が発見され、これをきっかけに、石田茂作氏と保坂三郎氏の両氏の指導のもと、瓦経塚の学術的な発掘調査が初めて実施された。倉敷市教育委員会と倉敷考古館が携わったこの発掘調査は、後の経塚研究においても重要なものであった。

続いて石囲いや経筒と思われる陶製の筒が発見され、これを第二経塚とし

注1　独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所「文化財綜覧 web GIS」
注2　関秀夫『平安遺文』一九八一
注3　大本琢寿「吉備考古八十八－九」一九五四
注4　梅原末治『安養寺瓦経とその他の遺物』一九五一吉備考古八十一

た。陶製経筒の下部から金銅仏が出土している。経筒外容器の中に在るはずの経筒は失われていたが、第二経塚は紙本経を埋納した経塚と断定できる。この後、第一経塚の抜き取り跡の確認調査中に第一瓦経塚からわずか数十センチの場所から発見された粘土の塊が第三瓦経塚である。

第三瓦経塚の粘土の塊となった瓦経は、三つのブロックに切断され倉敷考古館に運び込み、整理を行っている。瓦経は未焼成といって良いほど軟質であり、癒着した状態であった。現在知られる瓦経の中ではこのような状態の瓦経は他に例を見ない。方形の瓦経三〇二枚、塔婆形瓦経三十九枚、円形板状瓦製品十一枚分、塔型瓦製品一基分、ほか不明品数十点が出土している。当時、粘土塊の中から瓦経の単位を見極めて丁寧に引き剥がし表面を判読していく、このときに水と筆で表面を何度も清拭しているため、後に判読できなくなる可能性がすでに示唆されていた。経種の照会には大正新脩大藏経を用いている。第三瓦経には法華経をはじめ、仁王経上下巻、薬師経、不動経、阿弥陀経、寿命経、心経六部、願文、懺法（行法）など十種が判明した。特に願文に「應徳三年」の記年銘と「安養寺」の寺号も記されており、発掘による埋納状況に加えて年代の特定もされた経塚として重要な発見となった。これらは「安養寺瓦経の研究」（以後報告書と記載）において報告されている。（注5）

遺物の現状について

瓦経は瓦という名称ではあるが屋根材としての瓦を転用したものではなく、最初から経典を刻むために特別につくられたものであり、素焼きの焼き物の板の状態を指して瓦と呼んでいる。未来に残すための不朽性のある素材として経典の支持体に採用されているのであれば、本来なら第一瓦経同様に第三瓦経も焼成して瓦状に仕上がっているべき物なのである。現状をみる限りほぼ粘土の板である。木箱と新聞包みから出した瓦経は多くは亀裂が入り、分離している個体も多い。円形の瓦は大きな歪みと亀裂が見られたが、もともと破損の多い埋納位置であったと報告されているため、歪みは一次整理時からと考えられる。そのような状態の遺物であっても水分を含ませた後の適切な処置や、紙と木箱による保存環境の保持により、未焼成の粘土であってもカビは皆無であった。未焼成で粘土状であることが最も深刻なのは耐久性がきわめて低いことである。報告書によれば、瓦経の解読された文字は方眼紙に写したとあり、報告書に各経典の翻刻が一部掲載されている。しかしその他の書き写した資料や実測図などが考古館には残されていない。そのため、経種判定は既に為されているが、その根拠となった翻刻を含め、遺物の調書作成など再整理が必要である。

写真記録について

安養寺発掘調査に関わる写真も考古館には残されていない。しかし発掘調査に携わった当時の考古館主事 鎌木義昌氏（岡山理科大学教授）のご遺族が平成三年にガラス乾板を岡山理科大学に寄贈しており、その中に報告書に使用されている写真二十八枚分がガラス乾板に残されていた。フィルムも同時に寄贈されており、岡山理科大学生にて整理が進められている。現在のところ出土した瓦経約三百五十五枚すべての写真は確認されておらず、ガラス乾板とフィルムの調査はひきつづき継続されている。（注6）

整理の手順

昭和三十六年『安養寺瓦経の研究』刊行に伴い整理・調査された瓦経のうち、一部は倉敷考古館にて常設展示している。一枚ずつ紙製の昆虫箱に入れ薄葉紙を緩衝材としており、ガラス蓋のまま展示していたが、紙箱部とガラ

注5　鎌木義昌編　一九五八『安養寺瓦経の研究』
注6　岡山理科大学博物館学芸員課程　二〇二四『備讃瀬戸地域の先史・古代遺跡を写したガラス乾板』「ひかり拓本プロジェクト」

写真1：安養寺第一経塚 瓦経 法華経
倉敷市教育委員会提供

スのゆるみや欠損など経年による不具合が生じているため、現在は蓋を取った状態で展示している。それ以外の瓦経は、一枚単位で新聞紙に包み、木製リンゴ箱十二箱に二十～三十枚ずつ立てて収納されていた。新聞紙の日付が昭和三十五年、六年のものであるため、以後開梱されていないと思われる。木箱の釘は経年劣化により腐食し、底板や横板が外れている箱もあり、木箱の外圧を失った遺物は破損しているものもあった。加えて包みの新聞紙も経年劣化のため散壊する状態であり、内部にあったと思われる出土位置と経種の記された遺物カードが分離するなど混乱が見られた。

これらは平成二十八年（二〇一六）に、就実大学と倉敷考古館により、破損した木箱からコンテナに仮移動する整理を行っている。瓦経は台紙と和紙の包みを用い、経種ごとに分類し、遺物カードを同封した。記録のため開封の際に斜光による写真撮影を行っているが文字は判読不明であった。同様の整理作業を引き続き行うが、コンテナに移された瓦経は観察を行い、台帳を作成する。木箱に残るものはひかり拓本の撮影の後、和紙で包み直して、遺物への負担を軽減するため一枚ずつ小型のトレーに移し替えた。

瓦経の拓本について

安養寺第三瓦経の判読を困難にしている理由の一つは未焼成による破損であり、もう一つの理由が、もともと文字の刻み込みが極めて浅いことである。第一瓦経塚の瓦経は焼成されており、文字もはっきりと判読できるが、比較すると文字の刻み込みが浅い。第一瓦経、第三瓦経ともに錐のような細く鋭い道具を使用して文字を書いており、第三瓦経においては針で書いたと表現しても良い細さである。通常の瓦経であれば写真のほか拓本が用いられるが、未焼成の状態ともいえる軟質な状態であることから、拓本は行われていない。針書きのような文字の細さ、浅さから明瞭に拓影が得られるとも限らない。

瓦経はその発見が江戸時代に遡ることも多く、古瓦の一種として好古家に蒐集されたり、拓本がとられるなどしていた。とくに播磨極楽寺瓦経においては、姫路藩主酒井忠之が、発見された約五百枚すべてを拓本にとらせている。極楽寺瓦経は江戸時代にはすでに贈答されたり、明治維新後に散逸しており、確認されている瓦経は姫路城の堀から発見された五十一点と、個人所有のものが知られているが、これは現物が失われていても瓦経の全容を知ることのできる例であり、拓影はじめ記録の重要性を示すものである。

ひかり拓本について

現代においては写真が拓本に変わる記録であるが、安養寺瓦経特有の問題として写真でも文字の判別が難しい点がある。今後も劣化の進行が想定される第三瓦経の記録としては、複数の記録法が必要と考え、ひかり拓本を試みることとした。

ひかり拓本は独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所が二〇二二年にクラウドファウンディングにより開発を行い、二〇二三年に一般運用が開始されたアプリケーションである。本来の拓本とは、水を用いて紙を石造物などの対象物に貼り、その上から墨を乗せて文字や文様を写し取る伝統的な手法のことである。対してひかり拓本は、対象物に様々な角度で光を照射・撮影し、複数方向からできた影から画像を合成する技術である。（国立文化財機構　奈良文化財研究所）。撮影にあたってはタブレットやデジタルカメラ、スマートフォンなど一般的な機材を使用することができ、懐中電灯の光源で撮影可能である。石碑の研究に多く用いられているが、金石文や瓦などにも応用することができる。対象物に直接接触しないため、劣化の進んだ第三瓦経には有効な手段と考えた。

写真2：安養寺第三経塚瓦経 心経
筆者撮影

写真2：安養寺第三瓦経の中で最も状態の良いグループのもので、経種は般若心経である。他の瓦経と比較するとやや黄色みを帯びており、幾分火を受けている可能性があるが軟質である。洗浄や剥離作業時の水分による縮み、ひび割れは他の個体に比べると少ないが、やはり文字のある面は摩滅して判読不明である。

写真3：は写真2のひかり拓本による画像である。罫線がより明瞭に確認できる。まっすぐな定規や刃物を押し当てたような線であり、引き掻いた粘

写真3：安養寺第三経塚 瓦経 心経［ひかり拓本］
筆者撮影

土の塊は確認できない、文字が在ることは確認できるが、摩滅のため現在判読は難しい状態である。上下の界線と縦方向の罫線が十一本あり、線の間に文字が残存していることは確認でき、報告書によれば心経であり、裏表両面で完結する文字数になる。裏面は安全確保できる状態を確保できてから撮影することにし、今回は見送った。目視や写真よりも表面の砂粒が確認でき、精緻な胎土ではあるが水漉し粘土のみではないことがわかる。

写真4：仁王経　通常の写真でも文字が判読できる個体である。

写真5、6：仁王経（ひかり拓本）　通常撮影でも十分に文字が明確であるためひかり拓本にも文字が確認できるが、ひかり拓本では肉眼では確認で

写真4：安養寺第三経塚 瓦経 仁王経
筆者撮影

写真5：安養寺第三経塚 仁王経［ひかり拓本］
筆者撮影

写真6：5の拡大 布目か［ひかり拓本］
筆者撮影

写真8：円形瓦 10（4）［ひかり拓本］
筆者撮影

写真7：円形瓦 10（4）
筆者撮影

きないスノコ痕のような横方向の単位と、布目も確認できる。

写真7：円形瓦　安養寺第三瓦経には十一枚の円形の瓦がみられ、六点については仏像などが描かれた絵瓦として報告されている。ひずみが非常に大きく、崩壊の度合いが最も激しい。石膏が入れられていることから発掘当初から状態がよくなかったことがうかがえる。包みのメモには「丸10（4）」とあったが、報告書図面の10.のほか、報告されているものとは形状が一致しない。

写真8：円形瓦（ひかり拓本）　通常光でも曲線が多く見えていたため図像があることは想定されるが、この個体には直線がいくつも確認できる。仏像を描いた針描より若干太い線であるため整理時についた傷の可能性は無視できないが、直線を描いた絵瓦として形状は方形であるが伊勢山田旦過経瓦に曼荼羅の例があるため、円形瓦の直線が図像に関係ないとは言いがたい。

おわりに

安養寺瓦経の再整理、ひかり拓本による記録は着手したばかりで途中経過である。確実に今後も劣化が進んでいくことが予想される瓦経に対して、通常行われる実測は資料の状況を見ると難しい。瓦経が基本的に規格品であること、また計測されている数値は報告されているため新たに実測は行わない。より多くの情報を残す手段としては写真とひかり拓本が適切である。今回のひかり拓本撮影では、曲線より直線に有効であることがわかった。報告書においては円形瓦経の曲線についてのみ触れ、図像の意味づけを見送っているため今後円形瓦の図像復元を重点的に行う。図像が明らかになることで、安養寺第三瓦経塚の持つ性格を検討することができる。五十六億七千万年を待たずして偶然発見され、経塚から地上に姿を現した瓦経、目的は変われども、これらを後世に引き継ぐことはミュージアムの重要な役目である。ひかり拓本をはじめ、新しい技術で記録を残すことが今後の瓦経研究の発展につながれば幸いである。

謝辞

朝原山安養寺、徳澤啓一（岡山理科大学）、曽根正人（就実大学）、田中愛弓（赤磐市山陽郷土資料館）倉敷市教育委員会

参考文献

倉敷市教育委員会「倉敷市史」
岡山県史編纂委員会　一九八五「岡山県史考古編」
『備中誌』一九六〇
岡山県立博物館一九八六「朝原山安養寺」
関秀夫　一九八五「経塚遺文」一九九九『平安時代の埋経と写経』
倉敷市教育委員会「倉敷埋蔵文化財年報　倉敷発掘調査報告1」
高野孤鹿　一九七四「筑前愛宕山瓦経の研究」
時枝努　一九九一『瓦経に描かれた仏像―安養寺経塚出土例をめぐって―』
間壁忠彦・間壁葭子一九六五『願文より見た瓦経塚造営の意趣―新資料倉敷市安養寺瓦経願文を加えて』「岡山史学」
鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子一九六〇『安養寺瓦経本「法華三昧行法」の復元』「日本歴史考古学論叢」
雄山閣　一九三六「仏教考古学 第六巻」
安藤孝一　一九八〇『備中安養寺裏山経塚出土の瓦経』「月刊考古学ジャーナル」一七六
安藤孝一編　二〇一一『経塚考古学論考』
石田茂作　一九五八『瓦経の研究』一九七八「仏教考古学論考　一寺院編」
雄山閣　一九七一『仏教考古学講座Ⅰ』
保坂三郎　一九七一『経塚論考』
関根大仙　一九六八『埋納経の研究』
坂詰秀一　二〇〇三『仏教考古学事典』
鎌木義昌・亀田修一　一九八八『播磨江ノ上経塚』
谷口澄夫　一九七〇『岡山県の歴史：三十三』
姫路市教育委員会　一九九八『播磨極楽寺瓦経　特別史跡姫路城内堀出土　世界文化遺産姫路城発掘調査報告』
網干善教『伯耆大日寺出土の瓦経について』一九七九『瓦経の復元研究』一九七九『瓦経の復元と其の考察』
難波田徹　一九八〇『伝鳥取・大日寺出土の瓦経』一九三四　大正新脩大藏経